

乳 腺 扁 平 上 皮 癌 の 1 例

栗本 典昭¹・村山 正毅¹・別府 敬¹
 榎本 正満¹・片岡 健²・土肥 雪彦²

I. 緒 言

乳腺の扁平上皮癌の報告は、比較的希であり、乳癌全体の0.1~2.3%^{1)~3)}とされている。乳腺扁平上皮癌には、純粋な扁平上皮癌と、腺癌の一部に扁平上皮化生を伴ったものがあるが、今回、我々は、純粋な扁平上皮癌の1例を経験したので報告する。

II. 症 例

患者：57歳，女性。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：37歳，腸閉塞。

現病歴：1992年より，左乳房腫瘍に気付いたが，痛みなく放置していた。1993年12月，増大したため，近医受診，経過観察となった。1994年5月増大傾向続くため，当院を受診する。

理学的所見：身長154 cm，体重66 kg 肥満あり。貧血，黄疸なし。局所所見は，左乳房A領域に可動性のある5×5 cm大の，表面比較的平滑な，硬い腫瘍を認めた。皮膚に発赤，腫脹なく，胸筋固定なく，乳頭異常分泌を認めず，左腋窩リンパ節も触知しなかった。

喫煙歴なく，アルコールはビール1本/日，2児を出産，すべて母乳で，生理は1992年12月に閉経した。

血液検査(表1)：WBC 10200 と軽度上昇を認め，分類では分葉核球の増加がみられ，血沈も，34 mm/1 h, 67/2 h と亢進していた。GOT 45, GPT 45, Ch-E 1.58 と軽度上昇，脂肪肝によるものと考えた。また，CEA 2.0 ng/ml, CA15-3 13 U/ml であった。

表1 入院時検査成績

血液一般		生化学検査	
RBC	491×10 ⁴ /μl	T.P	7.7 g/dl
Hb	14.7 g/dl	Alb	4.3 g/dl
Ht	45%	GOT	45 u/l
WBC	10200/μl	GPT	45 u/l
St	1%	AIP	11.4 KAU
Seg	74%	γ-GTP	59 u/l
Ly	20%	T.cho	244 mg/dl
Mono	3%	腫瘍マーカー	
Ba	2%	CEA	2.1 ng/ml
Plt	32×10 ⁴ /μl	CA15-3	13 u/ml

乳腺超音波検査(図1)：左乳房A領域に，辺縁整で側方陰影を伴う，内部均一低エコーを示す，33×30 mmの腫瘍を認めた。皮膚，胸筋膜への浸潤は認めず，腋窩，胸骨傍リンパ節の腫大も認めなかった。

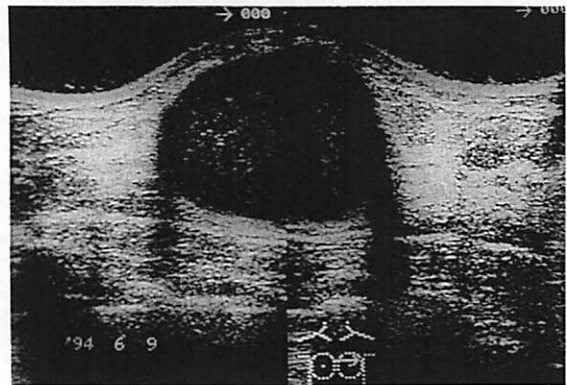


図1 乳腺超音波検査

胸部造影CT(図2)：左乳腺の一部から生ずる腫瘍を認め，明瞭な造影効果は認めなかった。超音波所見と同様に，皮膚，胸筋筋膜への浸潤なく，腫大した腋窩，胸骨傍リンパ節も認めなかった。

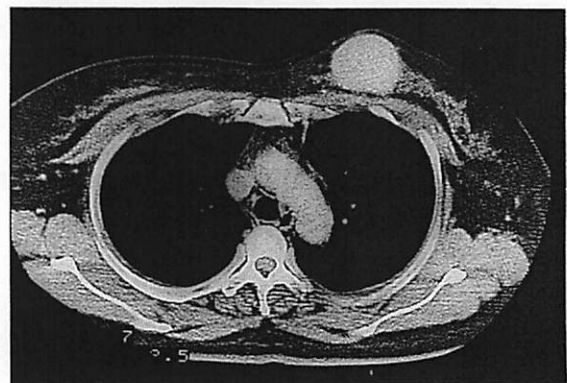


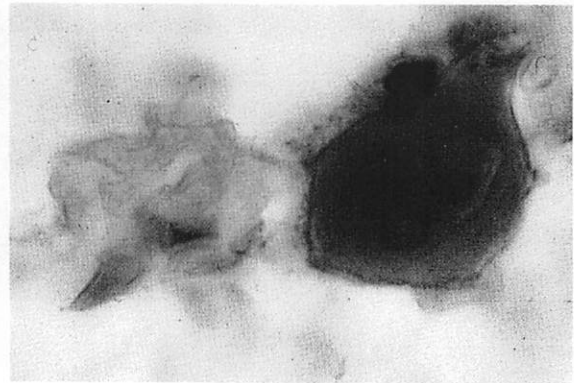
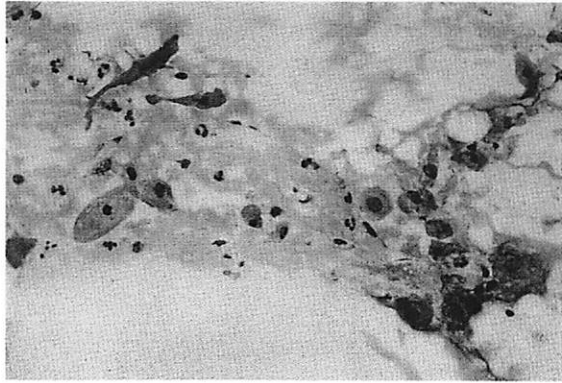
図2 胸部CT(造影)

¹Noriaki Kurimoto, ¹Masaki Murayama, ¹Takashi Beppu, ¹Masamitsu Enomoto, ²Tsuyoshi Kataoka, ²Kiyohiko Dohi: A case of squamous cell carcinoma of breast. ¹Department of Surgery, Iwakuni South Hospital, Iwakuni City, ²Second Department of Surgery, Hiroshima University School of Medicine.
¹岩国みなみ病院外科
²広島大学医学部外科学第二講座(主任教授：土肥雪彦)

穿刺細胞診 (図3 a, b) : 穿刺により得られた細胞は、比較的異型性が少なく細胞量も多くないが、核が著明に肥大し、濃染し不整形である。細胞は単離に近い状態で散見され、胞体は広く、不整形で、核を有するものは、一般的にライトグリーン好性で青緑色に染まり、明るく層構造をもつものもみられる (図3 a)。また、角化傾向を示すもの (図3 b)、無核の ghost

cell もみられる。背景として、多核白血球が多く散在しており、壊死物質もあり、扁平上皮癌の特徴を備えている。以上より他臓器の扁平上皮癌の細胞所見と同様であり、扁平上皮癌と診断した。

以上より、T2N0M0, Stage II 乳癌に対して、1993年5月定型的乳房切断術 (Brt+Ax+Mn+Mj) を施行した。



a

b

図3 穿刺細胞診

摘出標本所見 (図4) : 腫瘍は褐色調で、通常の硬癌等と全く外観を異にしていた。類円形で、中心部に白色を呈する部分があった。皮膚、大胸筋筋膜への直接浸潤は認めなかった。

病理組織所見 (図5 a, b) : 腫瘍細胞は、好酸性の豊富な胞体を有した多角形の細胞から成り、敷石状配列を示し、角化傾向もみられた。管腔形成、粘液産生など腺癌細胞はみられず、腺癌からの扁平上皮化生も見られず、純粋な乳腺扁平上皮癌と診断した。腋窩、鎖骨下リンパ節への転移は認めず、t2n0m0 Stage IIであった。エストロゲン、プロゲステロンレセプターとも陰性であった。

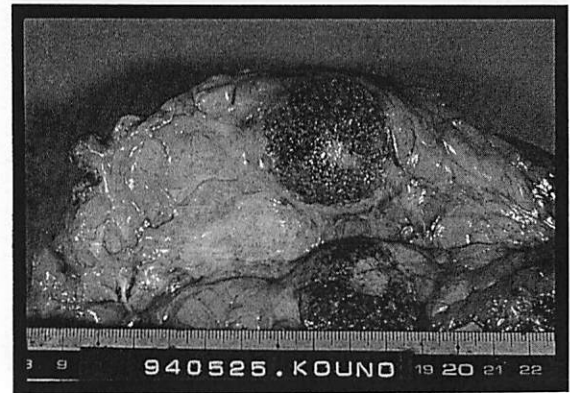
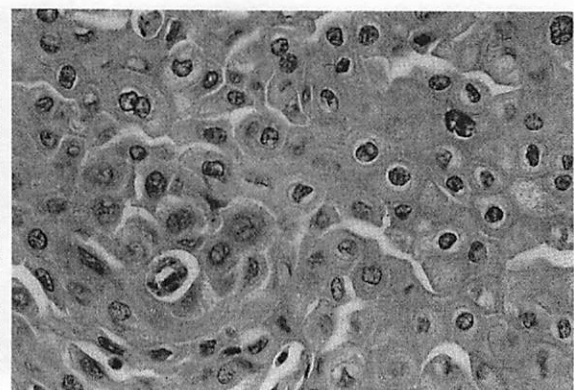
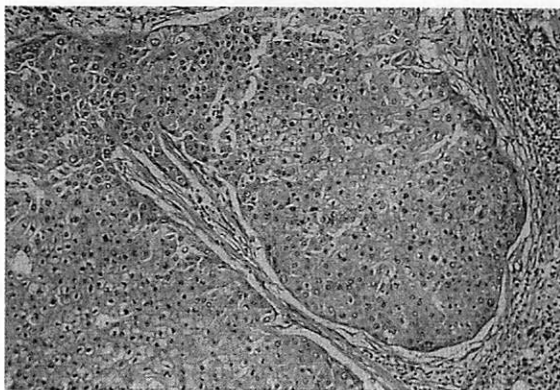


図4 摘出標本

術後経過 : 術後1年7カ月現在、再発の兆候なく、外来経過観察中である。



a

b

図5 病理組織所見

Ⅲ. 考 察

乳腺原発の扁平上皮癌は、稀な疾患で、全乳癌の0.1~2.3%^{1)~3)}、なかでも腺癌成分を含まない純粋型は、0.046~0.28%^{4),5)}といわれ、本邦での報告は本例を含め33例と極めて稀である。

発症年齢は、25~94歳、平均は52歳^{2),4)}と通常乳癌より高い傾向があるが、本例も57歳であった。腫瘍の最大径も平均5.4 cmと大きく²⁾、本例も4.5 cmと大きめであった。超音波検査、CT検査では、類円形の比較的均一な腫瘍であり、周囲組織を圧排するような特徴的な所見であった。中心に嚢胞を形成する報告が多い⁶⁾が、本例には認めなかった。

穿刺細胞診による診断が有用との報告がある^{7)~9)}が、本例でも有用であり、壊死物質を背景に多形性に富み、細胞質はオレンジG好染性などの特徴があり、他臓器の扁平上皮癌と同じ所見であり、扁平上皮癌と診断した。

治療では、他の乳癌と同様に、手術を中心に化学療法、内分泌療法を行っている報告が多い^{2),5),6)}が、本例でも定型的乳房切除術、術後 tamoxifen, 5'-DFUR を使用している。

予後は、山邊ら²⁾が本邦報告例53例を検討した結果では、5年生存率53%、10年生存率47%と、全乳癌に比べやや不良であった。また、Cornog⁶⁾らは、14例の検討で他の組織型と差異ないと報告しているが、症例数が少なく統一した見解は得られていない。本例は、術後1年7カ月、再発の兆候なく経過良好である。

乳腺扁平上皮癌の発生は、坂本¹⁰⁾も、多くは腺癌が扁平上皮化生を起こしたもので、扁平上皮化生癌と呼ぶべきものと報告している。Fisherら¹¹⁾は、1,000例の invasive ductal carcinoma を検討し、3.6%に扁平上皮化生巣を認めている。また、土屋ら¹²⁾は、癌化の時点で腺癌、intermediate cell、扁平上皮癌の三者に分岐し、扁平上皮癌が主座を占めていくという説を述べている。明確な発生の機構解明には、今後の症例の蓄積が大切と考える。

Ⅳ. 結 語

稀な、乳腺扁平上皮癌の1例を経験した。超音波、

CT検査所見では、周囲へ圧排性に増殖しており、摘出標本でも類円形、褐色調を呈し、特徴的であった。本例は、穿刺細胞診にて扁平上皮癌と術前診断し、摘出標本病理検査では、腺癌、扁平上皮化生とも認めず、純粋型乳腺扁平上皮癌と診断した。

文 献

- 1) 泉雄 勝, 遠藤敬一ら: UICC 乳癌調査小委員会による乳癌全国集計成績. 癌の臨床 28: 111-121, 1982.
- 2) 山邊和生, 三木康彰ら: 巨大乳腺扁平上皮癌の1例. 日臨外医学会誌 52: 1789-1792, 1991.
- 3) 久我貴之, 若松隆史ら: 純粋型乳腺扁平上皮癌の1切除例. 日臨外医学会誌 51: 1708-1712, 1990.
- 4) 薦田 烈, 白石恭史ら: 乳腺扁平上皮癌の2例と本邦報告例の文献的考察. 日臨外医学会誌 50: 1551-1559, 1989.
- 5) Toikkanen S: Primary squamous cell carcinoma of the breast. Cancer 48: 1629-1632, 1981.
- 6) Cornog JL, Mobini J et al: Squamous carcinoma of the breast. Am J Clin Pathol 55: 410-417, 1971.
- 7) 津村 勲, 高塚雄一ら: 穿刺吸引細胞診にて術前診断し得た乳腺原発扁平上皮癌の2例. 乳癌の臨床 7: 128-132, 1992.
- 8) 建部 祥, 三科 武ら: 乳腺扁平上皮癌の1例. 日臨外医学会誌 50: 520-524, 1989.
- 9) 小川明孝, 小山博記ら: 子宮頸癌を合併した純粋型扁平上皮癌の1例. 外科 50: 205-208, 1988.
- 10) 坂本吾偉: 乳腺腫瘍病理アトラス. 東京, 篠原出版, 1987, p. 66-68.
- 11) Fisher ER, Gregorio RM et al: The pathology of invasive breast carcinoma. A syllabus derived from the findings of the national surgical adjuvant project (protocol 4). Cancer 36: 1-85, 1975.
- 12) 土屋真一, 田久保海誉ら: 乳腺原発の扁平上皮癌の1例. 癌の臨床 29: 51-56, 1983.

(受付 1995-2-4)